TSロリ兄はふて寝をはじめました

ちゃとらねこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目を覚ましたらロリっ娘（美幼女）になっていたお兄ちゃんと、その家族や友人達がわいわいがやがやしながらドタバタするだけの謎のお話です。

小説家になろう様にも投稿してます。

目次

TSロリ兄はじめました ―――― 1
TSロリ兄はたんこぶつくりました 15
TSロリ兄は病院へ行きます ―― 22
TSロリ兄は緊張しました ―――― 28
TSロリ兄は心配になりました ― 33
TSロリ兄は恥ずかしくなりました 38

ＴＳロリ兄はじめました

ドンドンドン！

「おーい、お兄（にい）！朝！起きろー！」

また退屈でめんどくさい一週間の始まりを告げる騒音が、俺の睡眠を妨げに来た。

「お兄！早くしないと朝ごはんなくなるぞー！太ったら責任取らせるからなー！」

いや、妹よ。お前が食べるんかい。てか太った責任て……ダイエットに付き合わされんのかな？

まぁ、それはそれとして。我がうるさい妹が起こしに来たということは、そろそろ学校に行く準備をしなきゃならん時間ということだ。はあ、めんどくさい。

「はいはい、起きました起きました～。あと太りたきゃ勝手に太っとけ～」

寝ぼけ眼を擦りながら間延びした返事を返す。ちなみに、体はまだベッドに横たえたままだ。さて、二度寝二度寝～っと。

「さっさと起きて……は？んん？？」

いつもなら、『さっさと起きてこいよー！』と言って一階に朝食を食べに戻る妹の様子が、今日はなんか違う。どうしたんだろうか。二度寝の邪魔にならなければ何でもいいけど。

「え？お兄？え？うん!?え!?」

扉越しに、珍しく困惑した様子の妹の声が届いた。急に何なん？俺が何なんだよ。二度寝させろよ。

逆に困惑させられ始めた俺のいる部屋の前で、また妹が話しかけてきた。しかもさっきより大きな声で。

「おにぃ!?ちょっと入るよ!?いいね!?」
「は!?ちょっ、待てって！」
「よーいはいいかぁ！では、とつにゅー！」
「うぉい！話聞きやが……」

バンッ！

なんか口調が幼児退行した妹は、文字通りに扉を蹴破る勢いで部屋に入ってきた。

「へぁ？」

妹が俺を見て、間抜けな声を出して凍りついた。え、さっきからホントに何なの？怖いんだけど。はやく再起動して状況説明してくれよ。

「お兄が……お兄が……」

「お、俺が……？」

「お兄が、ロリっ娘誘拐してきたあああぁぁぁぁぁ～!!?」

バタンッ！

ドタドタドタ！

「へぁ？」

悲鳴を上げながら一階にダッシュで降りて行った妹を見送った俺は、数秒呆然とした後に――――

「はあああああああああああああああああ!?!?!?」

俺は誘拐犯じゃねー！

だがしかし、悲しいかな。俺の腹の底から放った絶叫は、ソプラノトーンのかわいいボイスとなって家中に響いただけだった。

◇　◇　◇

それからおよそ１５分ほどして（遅刻確定）、ようやく状況確認が終わった。というか、自分の体の確認が終わった。

視線を下に落とせば、ブカブカの男物のパジャマの隙間から僅かな曲線を描く胸元が

あり。更に下に手を伸ばせば、いつもなら少しこんもりしているところがなだらかになってしまっている。ベッドから降りて立ってみたら、元からあまり身長の高くない俺だったのに、さらに一～二回りは視線が低い。身長的に見ると、幼児退行は俺の方だったみたいだな……しかも女だし。てか、なぜ女？

髪は垂れてこないので長くはないのだろう。確認しようとしたが鏡がなかったので、窓に張り付いて反射させてみた。

「うわぁ……」

そこには美少女……ではなく、美幼女がいた。顔立ちは子供らしくぷっくりしていながらも、10人中10人が『かわいい』や『綺麗だ』と答えそうなほどに整っている。髪は肩に触れないぎりぎりの長さで、明るめらしい髪色が朝日を浴びてキラキラしていた。髪型？知らん。なぜって、女子の髪型なんて知る機会なかったんだもん。仕方ないじゃん。

まぁ、容姿についてはこんなもんか。声は普通にかわいい方だと思う。自分で聞いた

判断だからどれほどかはわからんけど。なかなかルックスはいいんじゃないですかな？

……って！なんで！幼女に！見惚れてんだよ俺は!?俺、断じてロリコンに非ず！しっかり自分を持て！俺はノーマル！決して幼い肢体に興奮する自称紳士ではないッ！

というわけで、自分を落ち着かすため、パチンと両手で頬を叩いてみた。

「……いたい」

うるうるうる。窓の幼女が涙目になった。ついでにほっぺたがちょっと赤くなった。どうやら夢ではないらしい。うっ。ち、ちょっとかわいいとか思っちゃったりしてないんだからね！……いや誰にツンデレしてんだよ。俺か。俺でした。一人漫才やってたわ、めっちゃハズい。

コンコンコン

さっきより控えめなノックが3回。そういやどっかで、ノック2回はトイレって聞いた気がするけど、ホントだったんだろうか。

「えーと、お兄？お兄であってる？」

振り返ると、妹が母を伴ってやってきていた。

「あらあらあら！かわいいじゃない！本当にこの子があのチビのくせに生意気でめんどくさがりで将来ニート確定な我が愚息なの!?」

「お母さん、事実だけどちょっと言いすぎだよ。そんなこと言ってたらまたすねかじりのゴミムシ兄に戻っちゃうかもよ？」

「それは嫌ね。このへんで勘弁しといてあげましょうか」

大概容赦ないよな、我が家の女性陣（アンタら）……

「俺のライフはとっくにゼロ通り越してマイナスなんだが？」

「「事実を言って何が悪いの（かしら）？」」

「グハっ……」

「あぁ！ロリ兄がベッドにぶっ倒れた！」

「介抱してあげないと……って、コイツあのすねかじりだったわ。でもかわいいから捨て置くのも……」

「水でも置いときゃいいんじゃない？」

「ま、それもそうね」

２つの足音が部屋を出ていき、少しして一つは戻ってきて、またすぐに去っていった。勉強机の上には、ペットボトルの水が一本。

はぁ、とため息をつく。

母と妹によるダブル口撃と、ロリになった衝撃によって虚ろになった思考の俺は、ベッドの上で思う。

もうちょっとさ、マシな反応、あっただろ。いろいろと……

そして絶妙に重い謎の疲労感を背負ったまま、俺の意識は睡魔に襲われて、無事（？）に二度寝へ突入していった。

ＴＳロリ兄はたんこぶつくりました

むくり。

一体俺が二度寝をはじめてからどれだけ経ったかはわからないが、起きた。まぁ、起きるときは普通に起きるのが人間だろうから、当然っちゃ当然か。まぁ、いつも通りに二度寝から覚めたってことだ。

「ぁー、いま、なんじぃ・・・？」

枕元の目ざまし時計に手を伸ばす。デジタルではないので、ひんやり冷たい金属の感触が手に伝わってきた。鳴らすとただただうるさいだけなんだけどね。だってジリリリ！ってかんじの大音量が鳴るからさ。母に『うるさいからやめなさい』と言われて以来妹が（いやそうな口調で）起こしにくるようになったため、ただの時計と化している。

「ん～？くじ・・・え、は？９時？９時!?嘘だろおい!?」

大遅刻だぞおいおいおい！もう一限の授業はじまってんじゃん！
慌てて跳ね起きながらベッドから飛び出・・・ようとして。

ドンッ！

「ふぎゃあ！」

いっそ綺麗なまでに、床に頭からダイブした。足に何かが引っかかったらしく、それでもつれてこけてしまった。
態勢を直して頭のてっぺんをさする。なんかボコって膨らんでる気がする。すごい痛い。めっちゃ頭に響く。・・・でも、顔面じゃなくてよかったわ。顔面強打とかシャレにならへんわ。

「大丈夫ー？すごい音したけどー」

もうノックさえしなくなった妹が無遠慮に侵入してきた。

「わー、随分おっきいのつくったねぇお兄」

は？おっきいって・・・まさかそんなにアレがデカくなってたのか!?

「ウソだろ？え、い、一体どれ位・・・？」
「う～ん・・・マンガで見るようなサイズ？」
「なっ・・・!?」

現実を直視したくないがために視線は動かさないが、どうやらかなりやばいっぽい。

「ど、どうやっておさめよう・・・」
「え？さすってればいいんじゃない？」
「さする!?ここで!?」
「え、それとも薬塗っとく？」
「は？薬でなにすんの？」
「たんこぶに塗っとけば痛みやわらぐかなーって」

「っ!?あ、ああ!たんこぶ、たんこぶね!」
「どしたの兄」
「あはは、いや、なんでもない」

言えねぇ。いつも通り起きたと思ってしまっていたために、おっきいのとやらを、その・・・男子のアレと勘違いしてた。そうじゃん今の俺幼女じゃんあんなんついてないじゃん。こんな勘違いしてたとか恥ずかしすぎて言えるわけねぇだろ。

「・・・穴があったら入りたい」
「頭隠してなんとやらじゃなくてたんこぶ隠してなんとやらってこと?」
「ハハハ・・・」

「って!そんなことより高校!やばい、遅刻遅刻、ぅ?え、どうしよこれ。学校行けねぇじゃん・・・」
「そーだねー・・・とりあえず、欠席の連絡したら?」
「あ、おう。そうだな、うん」

普段はちょっとおバカキャラ寄りの妹の方が冷静だったことに多少のショックを覚えつつ、充電器に繋いだままのスマホを手に取る。今の時代は便利になったもので、簡単に欠席の連絡ができるようになっていた。小学生の頃はわざわざ電話が必要だったのが懐かしい。

入学式の日に配布されたＱＲコードの紙を持ってきてスマホに読み取らせ、入力フォームを開く。ふむふむ、まずは学年組番号、と。１年の・・・・・・・・・うし。次は名前、と。亜方乃　創司、と。うんＯＫだな。次、理由か。うーん・・・

「なぁ、理由ってどうしたらいいと思う？」

「・・・とりあえず体調不良にしといたら？」

「まぁ、それが妥当か」

体調不良のためっと。

その後、残りの細かい回答欄を埋めて、送信ボタンをタップする。

「ふう、学校の方はなんとかなったか・・・って、アレ？なんでお前学校行ってないの!?」

今更気付いた。妹は中学生である。つまり、ばっちり学校の日なのだ。え、なぜに？

「母さんから兄の面倒見といてって言われた。だから仕方なく」
「母さんは？」
「仕事」

おいこら母上。息子の一大事でも仕事優先たぁ恐れ入るぜ。

「というわけで、兄」
「なんだね妹よ」
「・・・はやく準備して」
「え？」
「病院行くよ」
「ふ、服は――――――」
「コレ着ろ」
「ア、ハイ」

妹の眼力に屈しました。怖いです、はい。

ちなみに、いつの間にか用意されていた俺用の服は、ちゃんと女児用のやつだった。

いや、ちょっと待って？今からコレ着るの？マジで？嘘だろ？え、いやホントに待ってそれはいくらなんでも頼むからぁーーーーーーーーー!?

ＴＳロリ兄は病院へ行きます

家を出発して二駅ほど電車にゆられ、たどり着いたのは街の総合病院だった。

いやー、服がなんかヒラヒラふわふわして落ち着かなかったわー！んー？嫌じゃなかったのかって？んなわけねぇだろー！わはははは（白目）！・・・・・・・・・諦めたんだよ（遠い目）。

「ほら行くよ、に・・・じゃなくて、え～っと、う～ん、あ！そうちゃん？」
「おい、マイシスター。なんだよそうちゃんて」
「ん？ほら、創司だから創ちゃん。この呼び方なら女の子っぽいでしょ？」
「だから俺は男・・・あ、外でこれは不味い、か？」
「そうそう。というわけで、そうちゃん。女の子にジョブチェーンジ！さんはいっ」
「え!?ん、んんっ！うん、よし。わかった！天菜おねぇちゃんっ♪」
!?かわいっ・・・けどお兄だと思うとキモいね」
「やらせといて言わないでよおねぇちゃん！」
「なんか、ノリノリ？」

「・・・・・・ハッ!?」

やべぇ。いつの間にかこのロールプレイにノってた気がする

わ。気をつけにゃ、妹に妹扱いされる日が来たらたまらん。まぁ当分は大丈夫そうだけど。

そんなこんなでくだらない一幕をはさみながら、俺達は整形外科の受付に到着した。いろいろ迷ったけど結局どの科に行けばいいかわからず、一番なんとかなりそうな場所に落ち着いた結果である。わざわざスマホで外科やら内科やら調べてみたけど、マジでどこが適切かわからなかったんだよなぁ。

「えーっと、お父さんかお母さんは?」

受付に並ぶと、受付に座るお姉さんに苦笑いぎみで問いかけられた。

「私達だけです」

妹が俺の保険証やらなんやらを提出しながら言った。いやおねえちゃん妙に用意い

いな!?俺すっかり忘れてたわ。俺、これじゃあ妹のことバカっていえねぇじゃん。反省せねば。

ちなみに受付のお姉さんは、何度か眉をひそめながらも、ちゃんと受付を済ませてくれた。

よーし、なんて説明するか考えるぞー!きっと頑張って話せばお医者さまもわかってくれるはず!

◇　◇　◇

そう思っていた時期が俺にもありました（フラグ回収）。

「あのねぇ、そういう冗談言いたいならお家でしてね?ここ病院なの。わかる?病院は怪我や病気治すところなんだよ?」

・・・率直に言おう。

うっっっっっっっっ　ぜ　ぇ　ぇ　ぇ　ぇ　ぇ　ぇ　ぇ　ぇ
ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇエエエエエエっっっっ!!!!!?
ぜってーわざとだろわかってて言ってんだろ煽りのセンス抜群だなおいお医者さまよおぉぉぉ!?仮にも患者としてんだぞこっちは!?
あとおねぇ（妹）ちゃん！お前も助け船の一つや二つ出してくれてもいいだろ!?ちょっと口角上がっててほっぺたプルプルさせてるせいで笑い声堪えてんの丸わかりじゃぁ！

「あの、先生・・・いくら子供だからって・・・」

さっきから超高速で眉を引くつかせている俺を見かねてか、看護師さんがお医者さまに話しかけてくれた。が、しかし。

「て言っても、急に『今朝に幼女になってた』って言われても、ねぇ?そんな物語みたいな話、あるとは思えないし」

・・・ほ～ん?そっちがそーゆー態度ならこっちも考えがあるぜぇ?さっき煽ったこと、後悔するがいい！

「え～？先生、『事実は小説より奇なり』って言葉あるの知らないんですか～？病院の意義を知らなかった小娘よりも実は頭悪いんですか～？ねぇ、ねぇ！」

悪ノリしたったわ！フハハ！すっかりした！今度はお医者さま（笑）が眉をひくつかせていらっしゃる！どうだ見たか！これがメスガキロールプレイの俺だぁ！

◇　◇　◇

その後病院を出たのは入ってから二時間後の時刻だった。

「アホ兄にはオシオキ」

「いだぁ!?頭殴るなたんこぶ痛いからぁ!?」

曰く、お医者さんと喧嘩した罰だとか。先に煽ったのあっちなのに・・・理不尽。

そう返したらさらに十発、ゲンコツを追加されてしまった。

「うっ、めっちゃ痛い・・・」

ちなみにこの時とある場所で。
看護師にデコピンという名の制裁を加えられて赤くなったおでこを撫でながら同じように痛がるお医者さまの姿があったとかなかったとか。

ＴＳロリ兄は緊張しました

たんこぶをたらふくこしらえた頭で家に帰って来た俺と妹は、時間もいい感じだったので昼食をとることにした。

俺いつものようにカップ麺を漁りに行こうとする。いやぁ、カップやきそばが大好きなんだよなぁ・・・体にはあんまりよくないだろうけど。うまいもんはうまいんだ。ちなみに、たまに激辛を食べた結果口に氷を放りこんで悶ている俺を目撃することも可能だ。あん時はやばかった。口が辛いじゃなくて痛い、むしろなんか苦味みたいなかんじになってしまった。苦味は勘違いかもしれなかったが、とにかくやばくてやばかった。なお、妹はそんな俺を爆笑しながらからかってきてました。

「なんかあるかな～っと。・・・なに？」

「いやお兄（にい）、何してんの？」

「昼飯探し」

ゴチンっ！

「いぎゃあ!?」

本日何度目か忘れたが、また頭を殴られた。ばっちりたんこぶに当ててきやがって・・・!

「何の恨みがあるというんだぁ!」
「フフフ、それはもちろん・・・」
「もちろん・・・?」
「なんとなく!」
「ちくしょーめー!」

今すぐ妹にゲンコツかましたいのに、身長足りなくて届かんッ・・・!なんとか叩いてやろうとピョンピョン飛び跳ねると、妹がフッと鼻を鳴らして笑みを浮かべた。くせう、低身長め。あの妹に笑われたんだ。一生恨んでやるうぅぅ・・・(涙目)!

「あっかわい・・・じゃなくて、今日くらいは私がつくったげる。何があるかわからない

し、一応ね」
「え、お前が？明日の天気は隕石のち地球滅亡か？」
「・・・さて、たんこぶはあと何個ほしい？ん？」
「スミマセンデシタ」
「ふんっ！」

もうヤダたんこぶはやめてくれ。既に一生分のたんこぶは今日だけで作り終えたんだ！おかわりなんていらないよ！台所に行く妹の後ろを戦々恐々としながらついていって、冷蔵庫から牛乳を出してコップに一杯注いで飲んだ。ふぅ、うまい。一番いいのは風呂上がりだけど、普通に俺は牛乳が好きなんだ。

・・・オシッコしたくなってきた。
思えばまだ今日は一度もトイレ行ってなかったじゃん。
「・・・トイレ行ってくる」
「ん、わかった」

台所を出て廊下を少し進み、トイレの戸に手をかけて・・・リビングに戻ってスマホを持ち、今度こそトイレに入った。

「なんか女子のトイレって男子とはいろいろ違うんだったよな・・・？いや当然ではあるんだけども・・・」

何かでそんなことを聞いた気がした俺は、スマホでちゃんと調べながらやることにしたのだ。トイレ入る前に気づいた俺、マジでグッジョブ！

※少しの間、清らかなる流水が奏でる、心安らぐ自然の音楽をお楽しみください※

「・・・・・・・・・」

「あ、お兄。大丈夫だった？初めてのお花摘みは」

「変に隠そうとせんでもええよ・・・はは。ようやく、女子のトイレが長い理由がわかった気がする・・・」

「それはなによりだよ」

ふふん、と今度は得意げに鼻を鳴らす妹。

「あ、飯あとどれくらいでできる？」

「もーちょっと待ってて」

「うーい」

はぁ。女の子体験と言えばいいのか、服に続いて２つ目だったわけだが。

「・・・気疲れがひどいわ」

これから起こりそうな第３第４と続きそうな受難の数々を思い浮かべ、もう遠い目で嘆息するしかない俺であった。

誰か助けて？

TSロリ兄は心配になりました

「お兄ー！できたからはよこーい」

お花摘みの一件の後、俺はスマホを持って一度自室に戻っていたため、妹が呼んでくれた。さ～て、いっちょ妹作の飯を食べに行ってみるとするか！・・・ご飯と言う名の真っ黒な炭じゃないよな？

「んで、何つくったんだ？」
「まぁ、今日は無難にチャーハンつくったよ」
「・・・ふ～ん？ちゃんと食える物なんだよな？」
「どーゆー意味だコラ」

指をパキパキ鳴らしながら近づく妹から距離を取りつつ反論する。

「いや、お前が小学生の時の頃のアレ忘れたのか？」

「？」
「オイコラてめぇ」
「え、なんかあったっけ？」

やべぇ、めっちゃイラッとした。あの悲劇を忘れてるとか、いくら妹でも許さんぞ・・・！

「なんか弁当つくってもってこい的なやつでさ、お前だし巻き卵つくったろ」
「あったようななかったような・・・」
「そん時お前がつくった失敗作があったんだ。それはもう真っ黒になった柔らかい炭みたいな物だったんだわ」
「・・・・・・」
「なんでも、『焼きすぎちゃった』らしくてな？側面を見ればかろうじて巻いた跡はみえたんだが、まあ見事に全部の層が黒かったんだわ」
「あっ・・・、」
「そんでな？お前曰く『もったいない』ってわけでさ、その黒い物質、どこ行ったと思う？」

「ごめんなさい許してください私が悪かったです」

お、妹をやり込めることに成功したようだ。よし、このネタたまに使ったろ。

「まぁいいや。じゃあ早速、実食タイムといきましょーか」

「だ、大丈夫だから。そんなヤバい物は作ってないから」

額に汗を浮かべた妹が皿に盛り付けられたチャーハンを持ってくる。おお!ちゃんとチャーハンだってわかる見た目だ!普通にうまそうだな。

「では、いただきます」

「・・・・・・・(ゴクリ)」

「・・・うん、普通に食える。うまいな」

「・・・・・・・(ホッ)」

なんか妹の顔見りゃなんて言いたいのかわかるくらいにはコロコロと表情が変わってる。ちょっとおもろい。

さて、これで俺の口内の安全が確認できたことだし！改めまして、いただきます！

「お兄（にい）、部屋で何やってたの？」
「あぁ、う～んと、あれだ、アレ」
「アレって何って聞いてるんだけど・・・」
「あ～っと、欠席の連絡をし直したんだよ」
「なんで？」
「いや、だってさ体調不良って曖昧過ぎな気がしてさ。それでまぁ、ちょっと、ね」
「はぁ・・・で、なんて書いたの？」
「ん？そりゃ正直に『ちょっとＴＳしちゃったので念の為に自宅で様子を見るため』って。あと、病院に行ったことも備考欄に書いた」
「マジか。この兄（あに）まじか。大丈夫かコイツ・・・？」
「ん？どした？」

「いや、ちょっとお兄の将来が本気で心配になっただけ」
「いやしつれーな。何がおかしいんだ。全部事実だぞ？」
「はぁ」

なんか、妹にかわいそうな子を見る目で見られました。嘘なんて書いてないのに。
いやね？ちょっとネタに走ったかんじにしたのはホントだけどさ。一つ言っとく。

現実逃避でもしなきゃ突然ＴＳしたっつうこの状況についていけるわけねぇだろ～～～～～～!!!?

ＴＳロリ兄は恥ずかしくなりました

昼飯後は特に何もなく、だらだらしてたら晩飯の時間になった。

いやぁ、休日って過ぎるのはやいよね。ホントは学校だけど。でもそのなんというか、悪いことしちゃってるかもっていう状況もまた悪くないというか…

「あ、兄。さっき母さんからメールで急用ができたせいで今日帰れそうにないってさ」

「へー」

至極どうでもいい。むしろ帰ってこんでいい。父は単身赴任なので問題ナシ、母が帰って来たところで多分いや確実におもちゃにされるので、しばらくは帰ってきてほしくないまである。急用君、ありがとう。

「というわけで夕ご飯もテキトーにつくったげる」

「へいへいよろしく」

そんなこんなでやっぱり時間はあっという間に過ぎていき。

晩飯もちゃんと食べられるかを確認してからしっかり完食し、とうとう来てしまった。この時が。

「ＴＳモノで定番かつお約束イベント…！ずばり、初のお風呂っ！」

「うっさい兄！」

「ごめんなさい」

ただ、やはりＴＳってお風呂イベントは定番じゃない？自分の体を見てただあたふたするのか、はたまた欲情しちゃってそういう行為に及んじゃうのか。浴場は良くも悪くも分岐点と言えるかもしれない。

「兄、タオルと着替はもう置いてあるからさっさと入ってきて」

「うーい」

内心ドキドキしながら脱衣場へむかい、恐る恐る着替えをした後に浴室へ入る。

果たして、俺は…

「……」

なんにも感じなかった。せいぜい、年齢通りのツルペタ幼女だなぁってなっただけ。でも正直、自分の体で興奮するのを想像したらちょっとキモかったのでこれでよかったのかな…

後は淡々と体を洗い、そこで手が止まってしまった。

体は一応洗い終わっている。敏感なところはめちゃくちゃ注意しながらちゃんと洗った。では、なぜ止まったのか？

「…髪の毛って、どう洗えばいいんだ？」

なんかで『髪は女の命』みたいな事聞いた気がするし、短いとはいっても女子になった以上は髪にも気を配る必要がある気がする、が。今まではテキトーにシャンプー取ってゴシゴシ、ジャーでおしまいだったんだから急に言われてもわかりっこない。

スマホとかで調べなかったのかって？全裸幼女（自分のはだか）でどうなってしまうかで頭がいっぱいだったんだ。くそっ！トイレの時はちゃんとできたのに！笑いたきゃ笑え！煩悩まみれってな！うぅぅ…

「お兄、お風呂は大丈夫そう？」

「っ！マイシスター！いいところに！」

「えっ、なに突然」

「ふはは！お前に俺の髪（幼女）を洗う権利をやろう！」

ゴキゴキゴキ

「あ、はい。すみませんでした。どうか私めの髪を洗っていただけないでしょうか」

「…よろしい」

指を鳴らす妹に屈しました。いやだってさ、あいつの目がさ、明らかに俺の頭のてっぺんの一点だけを見つめてんだもん。嫌でもわるわ。ぜってぇありゃたんこぶを追加する気だった。たんこぶはもう嫌なんだ…身長縮みそうなくらい痛いんだぞアレ…

「説明してあげるから聞きながら覚えて」

「りょーかーい」

「じゃあまずは――――――」

数十分後、風呂から出てきた俺の頭は、外見は綺麗サッパリ、中はぐちゃぐちゃとい

うちょっと混沌(カオス)とした状況に置かれていた。

シャンプーとリンスをコンディショナーがトリートメントで馴染ませて……？

どうやら、暫くは妹のお世話になりそうな予感がした。

あ、兄としての面目と威厳が…え？はじめからなかった？うっさいわい！